ユダヤ人とアメリカ仏教
―― 仏法を愛するユダヤの民 ――

岩　本　明　美

目　次

1　はじめに――仏教の西洋への伝播
2　ハスの中のユダヤ人
3　ジュブ（ユダヤ人仏教徒）の歴史
4　ユダヤ教の根と仏教の翼
5　魅力的な仏教
6　現代ユダヤ教の困難
7　先祖返り？――仏教からユダヤ教へ
8　ユダヤ教メディテーション
9　結び――慈悲心あふれるユダヤ人
付録　活仏・チョギャム・トゥルンパ

キーワード：ジュブ，ユダヤ人仏教徒，アメリカ仏教，西洋仏教，メディテーション

1　はじめに――仏教の西洋への伝播

仏教は，1893 年に開催されたシカゴ万国宗教会議において，アメリカへ公式デビューした，と見なすのが一般である[1)]。1950 年代から禅がブームとなり，ドラッグによるトリップの安全な代替として坐禅をする若者は，ヒッピー坊主と揶揄された。アメリカの仏教と聞いて，いまだこのようなイメージが心に浮かぶ日本人も多いのではなかろうか。

アメリカの仏教状況は，大きく変化した。現在，仏教は，アメリカをはじめとする西欧諸国で盛んに実践され，研究されている。その理由は，複数あり，複雑でもある。今は，筆者が理解し得る数点のみ簡潔に述べる。

まずは単純に，欧米における，特にアメリカにおいては 1965 年の移民制限法の撤廃に伴う，アジア諸国からの移民や難民の急増が，そのまま仏教実践者の増加をもたらしてきた。また，60 年代以降に禅師のみならず，チベット仏教のラマやテーラワーダ仏教の高僧たちが，とりわけダライ・ラマ 14 世やティク・ナット・ハンのような聖なる巨人が，西洋舞台へ登場したこと，それが仏教人気を高めたことに疑いはない[2)]。さらに，アジアで修行を積んで帰国した西欧人たちが開設した仏教センターなどが，安定し，洗練されてきたことも，仏教の浸透に貢献しているであろう。

ペンシルベニア大学宗教学科教授チャールス・プレビシは，過去半世紀の間に，利用可能な，

仏教の正確な一次資料と二次資料が飛躍的に増えたこと，またパーリ三蔵や漢訳大蔵経などを英語へ翻訳する大プロジェクトが着々と成果をあげつつあることなどが，仏教の正しい理解と実践を促している点に着目している（Prebish 1999a: 9）。ちなみにプレビシは，北米の大学で“American Buddhism”というコースを教えた最初の教師であり，西洋仏教研究を仏教学のサブディシプリンとして確立することに尽力した先駆者の一人である。現在，規模の大きい大学のほとんどで仏教は講じられている[3)]。

仏教の公式デビューからすでに百年以上が経過した今，アメリカには，実に多種多様な形態の仏教が存在する。禅や浄土真宗などの日本仏教，四大宗派――ゲルク派，サキャ派，カギュ派，ニンマ派――すべて出揃ったチベット仏教，台湾の佛光山などの革新的な中国仏教，タイをはじめとする東南アジア諸国のテーラワーダ仏教あるいはそのインサイトメディテーション，中国・台湾・韓国・ベトナムの禅など，それぞれ独自の展開をしている[4)]。アジアの伝統仏教がアメリカ社会の中で変容する一方，西洋人のための仏教（Western Buddhism）あるいはアメリカ仏教も生み出され，新たな創造を続けている。まさに仏教にとって新世紀の到来である[5)]。

さて，このような状況下，極めて興味深い現象が生じた。アメリカの仏教実践者は，大雑把に，アジア系移民仏教徒と，非アジア系仏教徒あるいは改心仏教徒（convert Buddhists）とに分けられるが[6)]，後者に占めるユダヤ人の割合が，およそ30パーセントにも達するというのである[7)]。

Jews and Buddhism: Belief Amended, Faith Revealed（「ユダヤ人と仏教――改められた信条，露わになった信仰」）は，この特殊な宗教現象に着目した，1999年に制作されたドキュメンタリー映画である[8)]。本稿では，高い評価を得たこのドキュメンタリーも資料の一つに加え，仏教がシナゴーグの実践に及ぼした影響も含め，現在に至るまでのアメリカのユダヤ人の仏教実践の実態について，そのあらましを描き出す。具体的には，ユダヤ人が仏教を実践する理由，仏教を実践するユダヤ人のアイデンティティの問題，ユダヤ教へ回帰する現象などを検討する。

ユダヤ教と仏教の歴史的な宗教交渉については，日本ではほとんど知られていない。したがって，本稿がそれに関する基礎的な考察となることを，筆者は目指した。今後，ユダヤ学・仏教学・宗教学・比較文明学・文化交渉学などの広範な立場から，学際的に研究が進められることが望まれる[9)]。

2　ハスの中のユダヤ人

仏教を実践するユダヤ人の存在を広く世に知らしめたのは，1994年に出版されたロジャー・カメネッツの（*The Jew in the Lotus: A Poet's Rediscovery of Jewish Identity in Buddhist India*）（『ハスの中のユダヤ人――インド仏教圏でユダヤ・アイデンティティを再発見した詩人』）である。2009年4月現在すでに33刷を重ねているこのベストセラーは，基本的には，1990年にインド

のダラムサラで行われた，ユダヤ人訪問団の八名の代表[10]とダライ・ラマ14世をはじめとするチベット仏教の高僧たちとの対話の記録である。しかし，この書物は，カメネッツの責務であった，対話の報告という域をはるかに超え，「ユダヤ・アイデンティティとは何か」を真摯に模索した軌跡ともなっている。というのも，カメネッツは世俗的なユダヤ人であったが，ダラムサラで著者自身の，そしてユダヤ人一般のアイデンティティの問題を直視せざるを得なくなったからである。

ダライ・ラマの魅力と，当地で仏教を実践するユダヤ人たちとの交流が，カメネッツを動揺させた。その動揺は，帰国後もアメリカで仏教を実践するユダヤ人たちとのインタビューを重ねねばならぬほど大きかった。『ハスの中のユダヤ人』は，そのインタビューの記録をも含む。カメネッツは，この自著をダライ・ラマに手渡すべく，再びダラムサラへと赴いた。RealPlayerで，書物を手にしたダライ・ラマが呵々大笑する様子をみることができる[11]。*The Jewel in the Lotus*（オーム・マニ・パドメー・フーム［ハスの中の宝珠］というチベット仏教で最もよく唱えられるマントラの英訳）をもじった，*The Jew in the Lotus*という書名が笑いを誘ったのであった。

『ハスの中のユダヤ人』は，ユーモアに溢れた，親しみやすいアメリカの現代ユダヤ教入門ともなる。ダライ・ラマとの面会に当たり，訪問団は，ユダヤ人 / 教徒を代表するものとして統一を取る必要に迫られた。しかし八人のそれぞれ異なった立場は，しばしばそれを困難にした。代表たちの困難に対処する様子から，読者は，実際のユダヤ教というものを知ることができるのである。

カメネッツの詩人としての予見力と大学教授・作家としての広範な知識は，ユダヤ教が現在抱えている問題とその克服としてのユダヤ教の革新の可能性をも浮き彫りにした。先のドキュメンタリーは，カメネッツが浮上させたそれらにスポットをあて，さらに『ハスの中のユダヤ人』刊行後のユダヤ教のスピリチュアルな革新運動の展開をフィルムに納めたものといえる。

期待以上の成果をもたらした，ユダヤ人 / 教徒とチベット仏教徒との，公式の初対話の内容については，ユダヤ教と仏教との比較を試みつつ，いずれ別稿にて紹介する予定である。今回は，紙幅の都合もあり，『ハスの中のユダヤ人』については，仏教を実践するユダヤ人に関連する記述を参照するにとどめ，ユダヤ人の仏教受容の歴史とあり様を検討することに終始する。

3　ジュブ（ユダヤ人仏教徒）の歴史

仏教を実践するユダヤ人の通称であるジュブ（JUBU）という言葉は，1960年代以降アメリカの仏教コミュニティの間である程度通用してはいたが，それを一般に普及させたのもカメネッツである（Seager 1999: 226）。まず，ジュブの歴史を簡単に振り返っておこう。

ジュブの歴史も，アメリカ仏教史と同じ長さをもつ。シカゴ万国宗教会議で仏教への帰依を

表明したニューヨークの豪商 Charles Strauss は，おそらく最初のジュブである[12]。1950 年代に新しい文学を創造したビート・ジェネレーションの教祖的存在である，詩人アレン・ギンズバーグ（1926–97）は，仏教徒でもあり，ユダヤ教徒でもあった。'Buddhist Jew'（仏教徒ユダヤ人）と宣言したこともあるようだが（Kamenetz 1994: 8），「ユダヤ人と仏教」は，'nontheistic Jew'（無神論のユダヤ人）と自己規定したと伝える。いずれにせよ，彼は，詩の創作力を両方の宗教から得ている。『ハスの中のユダヤ人』の著者は，この宗教詩人のアイデンティティに強い関心をもったようで，彼に一章（Chapter 19: A Buddhist Jew——Allen Ginsberg Story）を捧げている。

さて，1975 年には，ジョセフ・ゴールドスティン（Joseph Goldstein, 1944–），ジャック・コーンフィルド（Jack Kornfield, 1945–）とその他二名の四人のユダヤ人が，マサチューセッツ州バーレに，インサイトメディテーション協会（IMS: Insight Meditation Society）を共同で設立している[13]。四人とも，アジアでテーラワーダの教師に瞑想[14]の訓練を受けた経験をもつ[15]。

IMS の設立は，それ以前に始まっていたインサイトメディテーション運動の重要なターニングポイントとなった。コーンフィルドが 1988 年に創設した西海岸版，スピリットロックとともに，IMS は，今もこの運動の中心である。IMS の最も特徴的な活動は，週末や，短・長期の種々のリトリートプログラムの提供であるが，独立したセンターで働く，次世代のインストラクターを生み出す教育やトレーニングも行っている。

インサイトメディテーションとは，テーラワーダ仏教でヴィパッサナーと呼ばれる瞑想のことであるが[16]，元来は出家者の行う修行であった。IMS の創設者たちが帰国後還俗したことにより，その修行からアジア特有の文化的色彩が完全になくなった。そのことにより，また西洋人には受け入れがたい輪廻などの教義も付随しないため，インサイトメディテーションは，在家の改心仏教者の間で非常に人気の高い仏教となった。多くのユダヤ人がこの瞑想を経験している。

他方，テーラワーダの具足戒を受けたユダヤ人としては，スリランカで出家したニューヨーク出身のビク・ボーディ（Bhikkhu Bodhi, 1944–）が際立っており，西洋仏教徒のリーダー的存在である。2007 年に開催された，女性出家制度の確立を目的としたハンブルク国際会議（注 22 参照）でも，彼の意見が大きな支持を得た（岩本 2008: 34）。また彼の師であった，Nyanaponika Mahathera（1901–94）も，スリランカで出家したドイツ出身のユダヤ人であった。さらにいえば，国際女性仏教者協会（サキャディータ）の共同創設者であり，西欧だけでなく，スリランカでも非常に慕われた尼僧，アヤ・ケマ（Ayya Khema, 1923–97）も，ドイツ出身のユダヤ人である。

さて，禅方面では，東欧からアメリカに移住したユダヤ人を両親とする，バーナード・グラスマン徹玄老師（Tetsugen Bernard Glassman, 1939–）が，世界的に知られている。彼の大きな功績の一つは，禅を原動力として行った社会改良のための創意工夫であろう[17]。その工夫は

高く評価され，2007 年秋からはハーバード大学神学部修士課程の科目「仏教に基づく奉仕法」（Buddhist Arts of Ministry）の講師も勤めている。グラスマンは，前角博雄老師（1931–95）の法嗣である。ロサンゼルス禅センターを創設した前角が急逝する直前に，印可を受けて老師となった。ちなみに，彼が同じくユダヤ人のフィリップ・カプロー老師（1912–2004）の『禅の三本柱』を読んで，前角の弟子となったのは，1967 年のことである。

グラスマンは，1976 年に禅の教師資格を得て Sensei となった後，1979 年にニューヨークに移り，ニューヨーク禅コミュニティを創設した。1982 年にその運営資金調達のためにグレイストン・ベーカリーをオープンしたが，やがてその目的を拡大した。ホームレスなどの雇用や職業訓練なども含めるようになったのである。会社の利益と公共の利益を実現しているこのベーカリーは，諸組織のネットワークである，グレイストンマンダラの一部である[18]。1996 年に，グラスマンはグレイストンを離れ，ニューメキシコ州サンタフェで Zen Peacemaker Order（現在，Zen Peacemakers）を設立した。彼はまた，平和運動に献身する一方で，「ストリート・リトリート」と「アウシュビッツ＝ビルケナウ」という二種の「目撃証言するリトリート」（Bearing Witness Retreats）を実施していることでも知られている。前者は，米国内外の都市で行う，いわゆる乞食行である。後者は，悲劇の現場での瞑想を通して，我々自身の，そして他人の，普段は意識することのない側面を自覚しようとするものである。

グラスマンの他，禅のユダヤ人実践者としては，ノーマン・フィッシャー像穴老師（1946–）もよく知られている。フィッシャーは，1995 年から 2000 年まで，鈴木俊隆老師（1904–71）が創設したサンフランシスコ禅センターの長を，ユダヤ女性のハートマン全慶老師と共同で勤めた[19]。彼は，長い断絶を経て，再びユダヤ教と交流するようになったが，その点については後述する。

よく知られたユダヤ人チベット仏教徒としては，後に取り上げる実践者の他に，ラマ・スーリヤ・ダス（Lama Surya Das, aka Jeffrey Miller）がいる。彼は，60 年代後半に大学を卒業後，インドやフランスでラマの指導を受け修行を積み，ラマとなった最初のユダヤ人である。帰国後，宗派を横断する西洋人仏教徒教師ネットワーク（Western Buddhist Teachers Network）を立ち上げ，アメリカに適したダルマを創造しようと積極的に取り組んでいる。

カメネッツは，「アメリカのユダヤ人は，過去 20 年間に，数々のメディテーションセンターを立ち上げ，管理者，発行者，翻訳家そして解説者として活躍してきた。彼らは，とりわけ傑出した教師であり，宣伝家であった」[20] と感慨深く述べているが，確かに，Samuel Bercholz も，Helen Tworkov も，リック・フィールズ（1942–1999）も，ユダヤ人である。Bercholz は，アメリカでチベット仏教の著作を扱う最初の出版社であるシャンバラ書店の創業者であり，Tworkov は，最も有力な一般向け仏教雑誌 *Tricycle* の編集長である。フィールズは，ジャーナリストであり，詩人でもあったが，彼が叙述した，*How the Swans Came to the Lake: A Narrative History of Buddhism in America*（1981）は，最初で唯一の網羅的なアメリカ仏教史であり，今や古典と

なっている。

ユダヤ人の仏教学者も多く，カメネッツは，その数はアメリカの大学の仏教学の全教員の 30 パーセントに達するだろうと推定している（Kamenetz 1994: 9）。実は，冒頭で紹介した，北米の大学でアメリカ仏教を最初に講じたプレビシもユダヤ人である。思えば，筆者の同業者には，優秀なユダヤ人学者が多い。またカメネッツが『ハスの中のユダヤ人』に名を挙げているユダヤ人学者のうちには，scholar-*practitioners*（学者修行者）と呼ばれる，仏教徒でもある研究者もかなりいるはずである[21]。筆者が確認できるのは，ライス大学教授の Anne C. Klein（1947–）とウイリアムズ・カレッジ教授のスイス出身のユダヤ人，Georges Dreyfus である。両者ともチベット仏教の実践者である。後者は，チベット仏教の博士号に相当するゲシェを取得した，最初の西洋人でもある（Kamenetz 1994: 140）。

一方，『ハスの中のユダヤ人』にダライ・ラマの通訳解説者として登場するアレクサンダー・ベルジン（Alexander Berzin）は，異色の存在である。彼は，ハーバード大学（極東言語，サンスクリット，インド学）の博士号を取得しながら，大学で教鞭をとる道は選ばず，彼独自の仕方で，欧米人が仏教に一層アクセスしやすくなるように日々努力している。カメネッツをはじめ，ベルジンを知ったユダヤ人の誰しもが，ユダヤ教の重大な損失を思わざるを得なかったすばらしい人物である。

ダライ・ラマが「マイラビ」と呼ぶ控えめな彼は，9 年間通訳解説者兼秘書として，幾度もダライ・ラマの世界ツアーに同行した。1969 年から 1998 年までは主にダラムサラに居住していたが，現在はドイツを拠点に活動している。世界各地で仏教の講義を行う傍ら，仏教原典の英訳作業等にも忙しい。ベルジンは，博士論文の調査のためにフルブライト奨学金でダラムサラを訪れた際に，チベット仏教の生きた伝統と出会い，ダラムサラで諸師について修行を積むこととなった。テクストの解読以上のものを見出したのである。中国語，サンスクリット，チベット語等に堪能な彼は，キリスト教宣教師によってなされた初期の翻訳の不適切な訳語を正す努力も怠っていない。仏教の重要なテクストの中には，瞑想の経験あるいはグルの指南がないと十分に理解できない箇所も少なくない。その点でも彼の翻訳は大変貴重である[22]。

以上，ざっと概観しただけでも，仏教の西洋への導入と定着に，ユダヤ人がいかに創造的に関わってきたか理解できよう。特に，70 年代半ば以降は，ユダヤ人を中心にアメリカ仏教が形成されてきたといっても過言ではない。しかし，なぜ，ユダヤ人は仏教を実践するのであろうか。

この点を検討するために，まずは『ハスの中のユダヤ人』に登場する三人のジュブについてみてみたい。第一の人物は，カメネッツが出会った，自らをジュブと呼んだ最初のユダヤ人であり，彼の親友のリーバーマンである。

4　ユダヤ教の根と仏教の翼

マーク・リーバーマンは，サンフランシスコの眼科医である[23]。ダラムサラの対話を企画し，ユダヤ人代表者を選出し，彼らの派遣費用等を募ったのは，彼である。リーバーマンはまた，ドキュメンタリー「ユダヤ人と仏教」の主要な制作協力者であり，かつ登場人物でもある。彼が，自宅の一室に安置した5フィートもある仏像に，ひざまずき礼拝する姿は印象的である。

カメネッツが15才の時，彼らはボルチモアの改革派シナゴーグで出会った。爾来，二人は親密な交際を続けている。リーバーマンの叔父は，有名な改革派のラビであった。彼の弟もまたラビとなっている。リーバーマンは，大学を卒業後イスラエルへ行き，イェシバー（ユダヤ教宗教学校）でしばらく学んだ。彼は，10年間のイスラエル滞在中に，ボルチモアで得たものをはるかに凌ぐ，深いユダヤ教の知識と，多くの正統派の実践を身につけた。ヘブライ語も流暢に話すようになった。

リーバーマンは，イスラエルの女性と結婚し，連れて郷里に戻った。70年代後半は，彼は，ジョンズ・ホプキンス大学で医学訓練を受ける，戒律を遵守するユダヤ教徒であった。カメネッツは彼から多くを学び，タルムード，ミドラッシュそしてハシディズムについて議論を交わした。また，しばしばボルチモアの古い荒れたシュール（シナゴーグ）で，一緒に祈りを唱えた。

リーバーマンは，1980年に医業の関係でサンフランシスコに移り，まもなく離婚した。ヨーガ教室で知り合ったナンシーが，彼にメディテーションを紹介した。それがきっかけとなり，彼は仏教へと導かれ，やがてダライ・ラマとも出会った。彼は，ナンシーと再婚した。彼女とともに仏教協会を立ち上げ，家庭でメディテーションのセッションをもつようになった。二人はまた，インドにあるチベット仏教僧院への旅行も重ねた。

ある日，リーバーマンは，American Jewish World Serviceのアクティブなメンバーの訪問を受けた。その人物から，ダライ・ラマがユダヤ人とユダヤ教についてもっと知りたがっていることを聞かされた。彼がダライ・ラマとユダヤ教徒との対話を思いたったのは，その時である。ユダヤ教徒も仏教について学ぶ必要があると痛感していたからであった（Kamenetz 1994: 10）。

リーバーマンは，熱心な仏教の瞑想実践者であるが，ユダヤ的なものも捨てていない。安息日には，彼の自宅のテーブルにはロウソクが灯り，先妻との間の一人息子はヘブライ日曜学校へ通わせた。「お父さんは，ユダヤ教徒なの，それとも仏教徒なの？」という息子の問いには，「ユダヤ教の根と，仏教の翼をもっている」（Kamenetz 1994: 255）と答えている。

「根」と「翼」について，カメネッツはこう述べる。

> 私は，マークがいう翼の意味するところを知っていた――仏教は，ユダヤ教が決してもたなかった方法で，彼を霊的にある場所へと運んだ。瞑想をはじめて数年もすると，彼は落ち着きを増し，神経症的なところが少なくなり（less neurotic），安らぎも増大したようにみえた。

私はまた，彼のいう根の意味するところも知っていた。我々はともに，それが含意するあらゆる義務や強迫観念（neuroses）をともなった，濃密な（intense），拡大したユダヤ家族の出身である。（中略）我々は，ホロコースト後の時代に，ユダヤ人の苦難を直接知っている人々によって育てられた。二人とも，反ユダヤ主義の長い歴史を知っている。しかしながら我々は，日常においては，ほとんど差別されることはなかった。我々は，一番よい学校へ通った。ありとあらゆる扉が，我々の前に開かれていた。我々は，自由に自分自身のキャリア達成の道を選択してきた。そしてそれが我々を，家族や幼なじみから遠ざけた。私は，ルイジアナという奥深い離散の地（*galut*）へと移住し，彼はサンフランシスコに落ち着いた。第一世代のアメリカのユダヤ人が脱走した一族であるなら，我々はさらに遠くへと脱出したのである。一部には，古くさい罪悪感，つまり自分の家族をがっかりさせるかもしれないという恐れが私をユダヤ教につなぎとめてきた。しかしマークにとっては，それはそれほどではなかったと理解できるだろう。（Kamenetz 1994: 13）

カメネッツは，ここではユダヤ教の根を家族との絆の点から解釈している。それがユダヤ教の根の意味する主要なものの一つであることに疑いはない。ただ，ユダヤ教の根は，それだけに限定されるものではなさそうである。他方，仏教の翼，つまりそれこそがリーバーマンを仏教に惹きつけてきたものに他ならないが，それは，はるかに理解しやすい。

5　魅力的な仏教

仏教の翼とは，カメネッツが認めているように，リーバーマンに静寂をもたらしたものである。つまり，根本的にはメディテーションである。彼がナンシーと自宅でメディテーションのセッションを始めたのも，そのすばらしい効能を認めたからであった。「ユダヤ人と仏教」でも，リーバーマンはメディテーションについて，「メディテーション・ルームにやって来て，出て行く。たったそれだけでいいんだ。やればやるほど，心がピュアになっていく」という主旨のことを述べている。

では次に，ダラムサラでユダヤ人訪問団と，「ユダヤ教徒 vs. ジュブ」という緊張をもって交流した，トゥプテン・チョドン（Thubten Chodron）を紹介しよう。チベット仏教を実践する彼女は，第一世代の西洋人ビク尼であり，今や西洋人仏教徒を代表する存在である。

チョドンは，1950 年にロサンゼルス郊外に生まれた。1971 年に UCLA（歴史学）を卒業後，1975 年にポスターで知ったメディテーションのコースに参加した。その時そのコースを主導していたゲルク派のラマ・トゥプテン・イェーシェー（Thubten Yeshe）に魅了され，ほどなく出家を決意した。申し分のないユダヤ人の夫と，約束された教職と，子供をもつプランを突然捨てた彼女の菩提心を，両親が理解できるはずはなかった。

何かを必死に求めていた十代，チョドンは，ユダヤ教の日曜学校へと足を運んだ。だが，そこ

で学んだものを彼女は受け入れることができなかった。不可知論と無神論に傾いた時期もあったし，社会奉仕上の理由からヒレル会（主として親睦と奉仕活動を目的とする伝統的ユダヤ人学生会）に加わったこともあった。しかしチョドンが長年持ち続けていた疑問に答えを見出し始めたのは，仏教の瞑想を実践するようになってからのことであった。彼女の疑問とは，「私はなぜ生きているのか」「人生の目的とは何なのか」「人を愛するということの真の意味は何なのか」といった類いのものである。

復讐に燃え，嫉妬深い神を好きになれなかったチョドンには，神をたてない仏の道が開かれた。彼女は，ネパールにあるラマ・イェーシェーの僧院で仏教教理の研究と実践を続け，1977年にシャミ尼戒を受けた。ビク尼戒（具足戒）に関しては，チベット仏教はその授戒制度を確立していないため，1986年に台湾へ行き，大乗仏教教団から受戒した[24]。チョドンは，非常に長期間，インドとネパールで，ダライ・ラマを初めとする高僧の指導を受け，修行に専念した。また3年間は，フランスのDorje Pamo Monasteryでも修行している。他方，指導者としては，イタリアのラマ・ツォンカパインスティチュートで2年間スピリチュアルプログラムを指揮し，シンガポールのアミターバ（阿弥陀仏）仏教センターの常住教師でもあった。そして2003年に，念願のSaravasti Abbeyを米ワシントン州ニューポートの近くに創設した。西洋人のための，伝統と革新の調和の取れた現代にふさわしいサンガ（出家者コミュニティ）である[25]。現在はそこを拠点に活動している。北米，南米，イスラエル，シンガポール，マレーシアや旧共産主義諸国などで仏教について講義し，ハーバード大学等の学術世界でも講演を行っている。彼女の温かみのある，明快な説法は，人気が高い。彼女もまた，ユダヤ人訪問団に，ユダヤ教の大きな損失を思わせた[26]。

さて三人めは，デビット・ロームである。ロームは，ショッケン書店の跡取りとして，極めて知的な家庭環境のなかに育った。彼らは「つねに書物に囲まれていたし，食卓はいつも高度な議論の場であった」（Kamenetz 1994: 257）。ショッケン書店（Schocken Books）は，フランツ・カフカ，マルティン・ブーバー，ゲルショム・ショーレムなどの著作を扱う，世界有数のユダヤ系出版社である。ロームによれば，彼の父は，ハーバード大学を首席で卒業した秀才で，リトアニア系ユダヤ人であった。おそらく，18世紀の高名なリトアニアのラビである，エリヤ・ベン・シュロモ・ザルマン（ビルナのガオン）の末裔であると考えられる。

ロームは，ニューヨークのホワイト・プレインズでバル・ミツバを迎え，ユダヤ教神学院の運営するヘブライ高校に通った。ボイルストン賞を受賞してハーバード大学（古典学）を卒業後，平和団体（Peace Corps）の奉仕活動で2年間ケニアで働いた。濃厚なユダヤ的背景をもつロームが仏教を実践するようになるのは，まったくの偶然であった。彼は，チョドンのように，特に何かを求めていたわけではなかった。東洋の宗教に関心のある高校以来の友人とヨーロッパをヒッチハイクしていた時に，その友人にスコットランドのサムエ・リン瞑想センターへ連れて行かれたのがきっかけとなった。

ロームは，瞑想に，「何かピッタリとした感覚――まさに直感そのもの」を見出した。「仏教修行の性質は」，力強くもあった。それは，「自分自身を育成する方法，リンポチェが自分自身と友達になると呼ぶ方法を示した。道があった。それは，仏教が大いに語るものである。我々は，実際これにコミットすることができるし，それを工夫し，それを踏み，前進し，探究し，深め，浄化することができる」。（Kamenetz 1994: 258）

サムエ・リン瞑想センターは，チョギャム・トゥルンパ・リンポチェによって 1967 年に創設された。チョギャム・トゥルンパは，カギュ（カルマ・カギュ）派のトゥルンパ系譜の第 11 代トュルク（活仏＝化身ラマ）であったが，ニンマ派の訓練も受け，宗派折衷運動（*ris med* or *rimed*）あるいは無宗派運動の支持者でもあった。1959 年にインドへ亡命，1963 年に英国へ留学したが，1970 年に北米へ移住した。その後，亡くなるまでの 17 年間，カウンターカルチャー運動を昇華させるように，前代未聞のアバンギャルド的な仕方で布教し，西欧世界にチベット仏教の一大基礎を築きあげた[27]。

この仏教賢者・トゥルンパに，マイモニデスを慕うかのように，ユダヤ人が群がったのである[28]。ロームもその一人であった。彼は，1974 年から彼の母が亡くなりニューヨークに戻るまでの 9 年間，この活仏の個人秘書を勤めた。

1983 年の彼の母の死は，大変奇妙な状況を引き起こした。仏教にかくも深くコミットしている人間が，ユダヤ系最大手の出版社の経営者となったのである。しかし，その面白い構図はそう長くは続かなかった。ロームは，1987 年にショッケン書店をランダムハウスへ売却した。観想共同体（comtemplative community）の感覚を求めて，カナダ・ノバスコシア州ハリファックスのヴァジュラダートゥ（本稿付録参照）に加わるためであった。トゥルンパはほどなくして他界してしまったが，ロームは，その後数年間，その組織の役員を勤めた。

6　現代ユダヤ教の困難

さて，今紹介した三名のジュブが仏教にコミットしている仕方や程度は，それぞれ異なる。しかし，いずれもが瞑想体験を契機として，仏教に深くコミットするに至っている。仏教は，実に様々な瞑想を説く[29]。三名のジュブが具体的にどのような瞑想をしたのかは知れない。ただ，今はそれは問題ではない。留意すべきは，瞑想が彼らにとって非常に新鮮であったということ，つまりユダヤ教はそのような実践を彼らに提供しなかったということである。

ユダヤ教は，メディテーションをもたないのであろうか。否，ユダヤ教にもメディテーションはある。ダライ・ラマにも提示された。ダライ・ラマがダラムサラへユダヤ人を招待した目的は，亡命状態にあるチベット人が離散の先輩であるユダヤ人からサバイバルの秘訣を伝授してもらうためであり，ユダヤ教の神秘思想（カバラー）とメディテーションについて学ぶためであった[30]。八名のユダヤ人代表のうち，ザルマン・シャヒターとジョナサン・オマーマンの

二人のラビがカバラーとメディテーションのプレゼンテーションを担当した。その詳細については別稿に譲らざるを得ないが，刺激的であったのは，ダライ・ラマがユダヤ教のカバラー及びメディテーションと，チベット仏教との間に，少なくない相似点を鋭く見出したことである。たとえば「空性」と「エイン・ソフ」（*ain sof*）[31] とは，驚くべき類似性をもっていた。

確かに，ユダヤ教にも神秘思想とメディテーションはある。だが，カメネッツが接したジュブたちは，ユダヤ教のスピリチュアリティにアクセスできないと訴えた[32]。ユダヤ人代表として対話に参加した再建派の女性ラビの Joy Levitt でさえ，プレゼンテーションされたような教えが存在すること自体に驚いた。

カメネッツが，1992 年 5 月にアレン・ギンズバーグにインタビューした際も，ありきたりの神概念に囚われている彼と「エイン・ソフ」について議論しようとした時，詩人は，こう切り返した。「系譜をもつどのグループがそれを教授し，さらにそれの理解，それの集注へと導く実践をもっているんだい？その伝統を体現している現代の教師は，いったい誰なんだい？」（Kamenetz 1994: 148）と。

「今日，ユダヤ神秘主義の伝統は，ルーバビッチ派のようなハシディズムのグループへもっとも活発に伝承されている」（Kamenetz 1994: 74）といわれる。シャヒターは，ハシディズムのコミュニティに生まれた[33]。一方，ハシディズムのコミュニティの生まれではないオマーマンは，ユダヤ神秘主義の正統の教師を彼固有の仕方で探し，二種の教説を継承している。東ヨーロッパの教説と，パリからエルサレムに入った北アフリカの教説である（Kamenetz 1994: 192）[34]。オマーマンは，ダライ・ラマからユダヤ神秘主義の流れに関して問われた時，神秘主義は以前はどの国にもあったが，その継承者の大多数がホロコーストで殺されてしまい，わずかの教師だけがイスラエルとアメリカへ逃れた，と説明している（Kamenetz 1994: 192）[35]。またシャヒターは，ユダヤ神秘主義の伝承が衰えた原因の一つとして，19 世紀のドイツにおける改革派の運動とともに始まった，ユダヤ教のリベラルな諸派による神秘主義の弾圧を指摘している（Kamenetz 1994: 150）。

ユダヤ教神秘主義の生きた伝統（人）がほとんど失われてしまったこと，つまりそれへのアクセスの困難さが，スピリチュアリティを求めるユダヤ人をして，仏教へと向わせた大きな理由の一つだと考えられている。現代のアメリカでは，ユダヤ教とは対照的に，仏教の瞑想の指導者はあふれ，それを実践する機会は容易に得られるからである。

もっとも，ロームがいうように，ユダヤ教にたとえ瞑想があったとしても，仏教の瞑想は天下一品である。仏教のゴールは解脱であり，解脱するための教えが仏教である。解脱へ至るための道は種々用意されており，階梯づけられ，構造化されてもいる。その階梯をのぼって行くための乗り物の一つが，レベル相応の瞑想である[36]。本来出家者の占有物であったそのような解脱のための修行が，近代になって在家者にもその大部分が実践できるようになった。それが，多くの西洋人を仏教に強く惹きつけてきたのである。

さらに仏教が唯一神をもたない点も，ユダヤの神を好まない宗教的なユダヤ人にとって，あるいは逆にユダヤ教を保持したまま仏教の瞑想実践をする者にとって，大きな魅力となっているようである。また，それと関連するが，大乗仏教に特徴的な仏教のユニヴァーサリスト的性格（衆生済度）が，選民思想を嫌うユダヤ人に，仏教の美点として映るようである[37]。ちなみに，ユダヤ教にも神秘思想があることをジュブたちに知らせ，彼らをユダヤ教へ連れ戻そうと躍起になっているシャヒターなどは，ジュブは仏教にエキゾチックな魅力を感じるのだろう，と推測している。

7　先祖返り？──仏教からユダヤ教へ

さて，仏教を実践していると言われるユダヤ人のうち，その多くは，ヨーガ教室へ通うのと同じ気楽さで，仏教のメディテーションコースや，週末リトリートプログラムに参加しているだけであろう[38]。具体的なデータをもっているわけではないが，チョドンのように具足戒を受けた修行者は，極少数であろうと想像される[39]。残りは，その両者の中間にある，すなわちお気軽タイプでも完全な出家者でもない実践者ということになるが，実は，そのような，かなりの程度仏教にコミットしたユダヤ人に，我々の関心をひく現象がおこることがある。それは，彼らがユダヤ教を発見したり，あるいはユダヤ教と復縁したりする現象である。しばらく，その現象について考えてみたい。

ダラムサラを代表として訪問した，フロリダ国際大学宗教学科教授のカッツはそういうユダヤ人の一人である。ネイサン・カッツは，70 年代，ナーローパ学院でチョギャム・トゥルンパを師と仰ぎ，仏教を研究するとともに，菩薩戒を受戒し，数々のタントラのイニシエーションも受けた。しかしトゥルンパは，結局は，ユダヤ教をもっと深く探究するようにとカッツを励した[40]。師の助言に従って，カッツはユダヤ的生活へと戻り，すでにかなりの年月がたつ。今や彼は，彼固有の個人的な実践において，非常にコミットした保守派ユダヤ教徒となっている。

カッツは，「仏教を通って，ユダヤ教へやって来た」と，自分自身を振り返る。というのも，彼は伝統的なユダヤ家庭に育ったが，仏教と出会うまではいかなる意味でも宗教的ではなかったからである。「がまんしなさい。瞑想を探究することは，おそらく［探究する］人がユダヤ教へ戻るプロセスの一部でしょう」（Kamenetz 1994: 269）というのは，仏教など東洋の諸宗教に走った子をもつ親へのカッツのアドバイスである。カッツは，15 年間仏教を実践した後，はじめてユダヤ教徒となったが，二つの宗教は両立しえないとみなし，以後は仏教の実践はしていない[41]。

他方，カッツとは逆に，二重の宗教的アイデンティティにうまく折り合いをつけたのが，ブーアスタインである。シルビア・ブーアスタインは，インサイトメディテーション運動の有名な教師であり，「ユダヤ人と仏教」にも登場する。彼女は，自著（Boorstein 1998: 5）で，こう主

張している。

私は，仏教徒であるので，忠実なユダヤ教徒である。私は仏教の教師たちから学んだ瞑想修行によって恐れを減らすことができ，人生に恋することができるようになったので，子供の頃から知っている 'thank you' という祈りの言葉が，自然に，しかも大きな喜びとなるまで回復するのを発見した。

ブーアスタインは，ニューヨーク・ブルックリンのユダヤ伝統の強い家庭で育ったが，やがてユダヤ・アイデンティティの感覚から離れていった。カリフォルニア大学（バークレー校）からソーシャルワークの修士号と，Saybrook 大学から心理学の博士号を得た後，彼女はサイコセラピストとして働いた。1970 年代中頃に，インサイトメディテーションを始め，のちに IMS の教師となった。スピリットロックの共同創設者でもある[42]。1980 年代には，彼女はナーローパ学院が主催した，仏教とキリスト教の主要な対話の仏教側の代表者の一人であった。しかしながら，1990 年代中頃には，ブーアスタインは，今度は自分自身を，戒律を遵守する，信心深いユダヤ教徒として描写し始めた。彼女は，仏教を経験したおかげで宗教的ユダヤ人となったのである。彼女は今や，ユダヤ教革新運動においても，よく知られた人物となっている。

さて次に，劇的にユダヤ教へと改宗したルーの場合をみてみよう。禅ラビと呼ばれたアラン・ルーは，シナゴーグにメディテーションの実践を取り込み，ユダヤ教を革新する努力を続けていたが，2009 年 1 月に 65 歳の若さで急逝した（Katz, Y. 2009）。ルーは，1965 年にペンシルベニア州立大学から学士号を，さらにアイオワ大学（Writer's Workshop）から修士号を取得後，サンフランシスコ禅センターとそのタサハラリトリート施設で禅修行に励んだ。しかし，禅の修行が進むにつれ，彼は自身のユダヤ性を発見するに至ったのである[43]。ラビになる決意をし，1988 年にニューヨークのユダヤ教神学院でラビとして叙階された。ルーが 1991 年から 2005 年までラビとして奉仕した，サンフランシスコにある保守派シナゴーグ，Congregation Beth Sholom のホームページに，彼の偉業を讃えて次のように言う。

・・・ラビ・ルーは，会衆並びにベイエリアのユダヤ・非ユダヤコミュニティ全体に強い影響を及ぼした。彼は，詩人であり，著述家であり，ユダヤ教と復縁する（reconnecting）以前は禅の修行者でもあった。

Beth Sholom に従事する傍ら，ラビ・ルーは，人気の高いユダヤ教メディテーションセンター，マコール・オール（Makor Or）をゾーケツ・ノーマン・フィッシャーと共同で設立した。そのセンターは今や，サンフランシスコ・ユダヤコミュニティセンターのプログラムの一つとなっている。畏敬の念をおこさせる話し手であり，社会正義のために働く活動家の代弁者であり，ホームレスの擁護者であった，ラビ・ルーは，2009 年に逝去するまで，会衆の名誉ラビであった[44]。

仏教実践によってユダヤの宗教性が意図せずに蘇った点，またユダヤ教と復縁後も瞑想を続けている点では，ルーとブーアスタインは似ている。しかし，二人の宗教実践の立場は異なる。

その相違は，ルーのブーアスタインに対する次の言葉によく示されている。

> 一つの［宗教］実践のある部分を，別の［宗教］実践をより豊かにするために利用することに何ら問題はありません。しかし，あなたは，あなたが中心にしている実践は何なのか意識しなければならないし，その道をゆくことについて純潔でなければならないでしょう[45]。

ルーは，ユダヤ教の実践をより豊かにするために，Congregation Beth Sholom にメディテーションプログラムを創設した。彼は，メディテーションの技法を仏教から学んだことを認めてはいるが，彼の道は純粋にユダヤの道である。

では，ユダヤ教メディテーションとは，何なのか。今後盛んになると予感される，ユダヤ教メディテーションについて，その運動の展開も含め，確認しておこう。

8　ユダヤ教メディテーション

ラビ・ルーのいうユダヤ教メディテーションとは，一口にいうなら，ユダヤ教のコンテクストでなされる瞑想である。ユダヤ教の祈りと会衆単位の実践（communal practice）の理解をより深めること，また日常生活におけるスピリチュアリティを高めることを目的とする（Katz, Y. 2009: 2）。ルーは，シナゴークでは，朝課（morning minyan）とカバラット・シャバットとトーラー研究の直前に，週に四回メディテーションのセッションをもっていた。興味深いことに，ユダヤの祈りがメディテーションを変えたともいう。「祈りは，メディテーションにおいて経験する彼の心の状態を説明するためのユダヤのスピリチュアルな言葉を，彼に与えた」[46]。それによって彼は，たとえまったく同じ瞑想をしても，仏教徒として瞑想している時には気づかなかった，瞑想でのスピリチュアルな可能性に気づいたようである。

ラビ・ルーがワークショップでユダヤ教メディテーションの指導をしている様子を，「ユダヤ人と仏教」で見ることができる。そのワークショップ（Translating Judaism, Translating Buddhism）は，ノーマン・フィシャーとともに，ルーが 1997（?）年にサンフランシスコ禅センターの関連施設であるグリーンガルチファームで開催したものである。その後 2000 年に，彼らは，マコール・オール（光源）を立ち上げている。

ルーの生涯の友であった，ノーマン・フィッシャーは，先述したように，アメリカの代表的な禅僧である。フィッシャー自身は，家族の死と親友のユダヤ教への改宗がきっかけとなって，長い間没交渉であったユダヤ世界と再び交わるようになった。ルーよりもはるかに伝統的なユダヤ家庭で育ったフィシャーの本道がなお禅であるのか，あるいはフィッシャーもブーアスタインのように二重のアイデンティティをもっているのか審らかにしないが[47]，彼の著作にはユダヤ教関係のものも登場するようになった[48]。フィッシャーは，「ユダヤ伝統の歴史において，別の文化との出会いによって活力を取り戻し，ユダヤ教を革新するのは，これが最初ではない

と思う」[49] と推測しているが，これに関連する神秘的なエピソードがある。

それは，デビッド・ロームがカメネッツに語った，彼が 1983 年にショッケン書店に戻った時に遭遇した，ラビ・カプラン（Aryeh Kaplan, 1934–83）の *Jewish Meditation* の原稿にまつわる話である。

> ジュダイカ編集長 Bonnie Fetterman が，原稿をもっていました。彼女は，少しそれにまごついていました。彼女は，カプランを知っていたし，尊敬もしていました。彼は，生粋の正統派コミュニティのラビでした。ところが，本としてまとめられた一連のトークは，幾分秘密裏になされたものでした。彼は，彼の会衆には属していない，学生の小グループと会ったのです。
>
> 彼女は彼がよい人物であることは知っていましたが，その神秘的な代物の一切合切をどうしたらよいのか検討がつきませんでした。私はそれを完全に理解できるとは必ずしも思いませんでしたが，私にはそのすべてが馴染みのあるもののように感じられました。彼が東洋の瞑想のなんらかの研究をしたことは明白でした。彼が叙述しているものの多くは，メディテーション，静慮（concentration），三昧（absorption），観行（insight practice），影像化（visualization）の性質をもっていました。彼はまた女性原理についても語っていますが，それは Bonnie が把握できず，省きたいものでした。私は言いました。「ダメだ。それはとても重要なんだ」と。私は，出版するよう強く奨め，編集も手伝いました。彼が，突然しかも非常に若くして亡くなってしまったのは，確かにひどすぎます。（Kamenetz 1994: 259）

結果として，カプランの本は，1984 年のショッケン書店のベストセラーの一冊となったが，ロームによると，その本は，ブーバーやショーレムのユダヤ神秘主義のものとは「非常に異なっている。というのは正統派ラビである実践者が，'You can do this' と言っているからである。それにそれは，ショーレムから得られるものとは確かに違っている。また，ブーバーから得られるものも，インスピレーションや，哲学的見方あるいは倫理的見方のみで，特定の瞑想訓練については得られない」。

ロームはその本に興味をもち，興奮した。彼はそこに教示されたメディテーションを試みることはなかったが，それらが彼が仏教で経験した実践と相応していると直感したようである。彼は，「ラビ・カプランが生きていないので，これがどんなコンテクストでおこっているのか，どんな教師原理（teacher principle）もしくは保護原理が，どんなサンガもしくはコミュニティが存在しているのか，そういうことにとりわけ」関心があった[50]。カプランの瞑想法の出自について確実なことはわからない。ただ，このような本の登場が，ユダヤ教メディテーションの実践が今後復興してゆく兆しの一つであることは確かなようである。

それを示すもう一つの兆しとして，Nishmat Hayyim（Breath of Life）の創設がある。2005 年 4 月にマサチューセッツ州ブルックリンに設立されたその組織は，シナゴーグやその他の

ユダヤ教施設と協働し，ボストン地域（Greater Boston）とニューイングランド地方全体にユダヤ教メディテーションプログラムなどを提供している。そのホームページ（http://www.nishmathayyim.org/vision.php）によると，そのような組織の出現は，ダラムサラ訪問団の一代表であった，Moshe Waldoks の 10 年来のヴィジョンの実現であった。彼は，“What is Jewish Meditation?”（2007 年 3 月）と題された一文の中でこう述べている。

> ・・・ユダヤ教の観想プラクティスは，あらゆる古代の叡智の伝統における瞑想プラクティスと大部分を共有する。（中略）ユダヤ教メディテーションも，独自の多様なテクニックと伝統を有している。すなわち，メルカバー派（the Merkavah），ルーリア派（the Lurianic），アブラフィア派（the Abulafian），ベシュト派（the Beshtian）などである。これら諸伝統は，ホロコーストの惨劇のために，そしてそれ以前にはユダヤ教を徹頭徹尾，合理的な西洋モデルへと鋳直す企てによって，我々にはほとんど失われてしまった。
>
> 過去 50 年間，数多のユダヤ人が仏教の瞑想修行を採り込む最前線にいた。その努力が，一層深いスピリチュアルな生活を求める，何千というその他のユダヤ人を惹きつけてきたのである。今，ユダヤ教のシナゴークの生活は，19，20 世紀のプロテスタントモデルを捨て，変容しつつある。そしてますます，スピリチュアルな成長と情緒的安寧のためのセンターとしての役割を意識するようになっている[51]。

ホロコースト後，ユダヤ人は，シナゴーグの再建に，つまり建物（ハードウエア）にばかり気をとられ，スピリチュアルな面（ソフトウエア）が疎かになったといわれている。シナゴーグのソフトウエアを充実させる効果的な手立てとして，メディテーションの導入が考えられているのである。現在，メディテーションを提供するシナゴーグは，どれくらいあるのだろうか。正統派シナゴーグが，メディテーションをその実践プログラムに組み込むとは思えない[52]。Congregation Beth Sholom のあるサンフランシスコも，Nishmat Hayyim がメディテーションプログラムを供給する地区も，元より仏教の人気の高い地域である[53]。つまりメディテーションに対する強い欲求があり，それを受け入れる素地が整っていた地域なのである。その他の地域で，ユダヤ教メディテーションがどの程度普及しているのか，筆者は把握していない。しかしながら，わずかとはいえ，仏教からそのテクニックを学んだメディテーションを実践するシナゴークが登場したこと自体，画期的な出来事ではなかろうか。二十年前に想像した者はなかったはずである。ダライ・ラマとの対話（1990 年）と『ハスの中のユダヤ人』の出版（1994 年）が，ユダヤ教に転機をもたらしたのかもしれない[54]。

9　結び――慈悲心あふれるユダヤ人

以上，百年を超えるユダヤ人の仏教受容の歴史とあり様を一瞥した。今みた，仏教瞑想技法のユダヤ教への取り込みが，実はユダヤ人を仏教へと駆り立てた不可思議な力の真の目的だった

のだ，といえるのなら，まだ話はわかりやすい。しかし事実は，そう単純ではない。お気軽な実践者を除いたとしても，その実践形態は様々であった。ルーのような劇的な回帰とまではいかなくとも，カッツのように，仏教瞑想を経験したおかげで宗教的なユダヤ人となる例は，確かに少なくはないようである。だが，ユダヤ人はたとえ仏教を実践したとしてもいずれはユダヤ教に戻ってくる，などとはいえない。チョドンやビク・ボーディなど，仏教具足戒をもつ者が，将来ユダヤ教徒となるとは，およそ考えられないからである。

ジュブのユダヤ教との関係は，それぞれのユダヤ教の根の質と強さによって，あるいはコミットする仏教の質と深さによって，つまり仏教的にいえば個々人のカルマ（業）によって決まるとしかいいようがない[55]。

ロームは，カメネッツがインタビューした当時（年月日不明）は，仏教センターで知り合ったユダヤ女性（by birth）と結婚して娘がいた。その 13 歳になる娘にユダヤ伝統へのアクセスを残しておきたい，ただそのためだけに，過越しの祭りやハヌカの祭りなどは祝っていた（Kamenetz 1994: 260）。ロームは，彼の仏教とユダヤ教との関係についてこう語っている。

「どんな点においてであれ，自分自身を定義する必要性も正確性も，日に日に感じなくなってきています。思うに自分は，現時点では，ユダヤ人仏教徒アメリカ系カナダ人（Jewish Buddhist American Canadian）でしょう。ユダヤ教は，確かに私のアイデンティティの強烈な部分ですが，仏教も同様です。私のプラクティス（行）は，仏教徒としてあり，ユダヤ教徒としてはありません。しかし，およそ，それらはまるで自分自身の異なった面を表しているかのごとくです。ユダヤ教は，私の家族であり，背景です。それに私はユダヤの歴史に対して強い感情をもっています」，とりわけホロコーストに対して。「仏教は，スピリチュアルな側面により関わってきます。つまり，一瞬一瞬，生をどう経験したらよいのか，心とそして他人とどうつき合えばよいのか，という実践にです」。（Kamenetz 1994: 258）

ちなみに，2004 年 3 月付け（Issue No.4）のシャンバラインスティチュートのニューズレター（Healing Society, Healing Ourselves at Greyston Bakery: A Conversation with David Rome and Julius Walls）によれば，ロームは，グレイストン財団企画部門のシニア副会長としてなお活躍しているようである。仏教の根本的教理（縁起と空性）に対しても深い洞察をもつロームの宗教心は，おそらく生涯，仏教であろう。彼のユダヤ教の根は，文化慣習的性質のものであって，ルーのような宗教的なものではない。

リーバーマンもまた，ロームと同じような根をもっているようだ。「ユダヤ人と仏教」では，彼はテーラワーダ仏教を学んだと紹介されており，彼の実践する仏教の形態には真面目な変遷があるようだが，なお仏教を実践していることに変わりはない。またそのドキュメンタリーでは，サンフランシスコにタイのテーラワーダのサンガを建立するのに尽力した，とも紹介されている。リーバーマンは，1995 年には，Tibet Vision Project を立ち上げた。募金などに奮闘し，2005 年 4 月現在，20 人のチベット人外科医を育成し，さらに荒野にテントを張って白内障の治

療を行い，2000 人以上のチベット人の視力を回復させている[56]。

ユダヤ民族特有の何かが，彼らの心をして仏教に向けさせるというようなことがあるのだろうか。仏教に惹かれるのはアメリカのユダヤ人だけではない。イスラエル人もそうである。ダラムサラの対話がもたれた 1990 年，当地にはダルマを求めてやってきたイスラエル人たちもいた。その数年前にインド政府がはじめてイスラエル人にビザを発給して以来，イスラエル人が怒濤のごとくダラムサラに押し寄せたという[57]。ちなみにユダヤ人訪問団は，アメリカからだけでなくイスラエルからのスィーカーやジュブたちも，土曜の朝の奉仕に招いた。帰還すべき地がまるでダラムサラであるかのように，出身地を異にする，幅広い年齢層のユダヤ人たちが，トーラーの磁力のもとに集結したのであった。まさにユダヤ教と仏教との縁の深さを思わせる象徴的な出来事である[58]。

ユダヤ教徒は，仏教にユダヤ人をとられる心の痛みを訴え，チベット仏教徒は，いいラマが西欧へ行ってしまうと嘆く。だが，この痛みと嘆きは，双方に大きな実りをもたらしてきた。今後，どのような展開があるだろうか。

本稿では，ユダヤ人の仏教実践について，その多様なあり方をできる限り多く示そうと努めた。そのため，なぜユダヤ人が仏教に惹かれるのか，という問いについては掘り下げることはできなかった。限られた紙面では，一面化した答えのみを提示せざるを得なかった。無論，ユダヤ人が仏教に惹かれるのは，仏教の瞑想法がすぐれているという点に尽きるものではない。チョギャム・トゥルンパにユダヤ人が群がった理由を探ることは，その問いの別の本質的な答えを導き出すことにつながると信ずる。（それほど，この活仏とユダヤ人との結びつきは強力である。）以下に，チョギャム・トゥルンパの境涯について略述したのは，そのためである。

本稿で行ったユダヤ人と仏教についての考察が，研究者のなんらかの興味を掻き立て，各々の専門の立場から，ユダヤ教と仏教の宗教交渉に関してより深い考察がなされることを期待するが，筆者自身は，とりわけ，キリスト教の仏教受容[59]とユダヤ教のそれとを比較分析することに関心を抱いている。というのも，キリスト教とユダヤ教，両者それぞれの仏教との対話においてさえ，すでにそのあり方に異なった傾向が認められるからである。

仏教は，一神教と区別して，つまり唯一神をもつかもたないかという観点から，ユダヤ教・キリスト教・イスラームとは異質の宗教として捉えられ，そういう枠組みのもとで比較がなされることが多い。だが，仏教・ユダヤ教・キリスト教の三者についていえば，教義上そして実践上，仏教とユダヤ教の両者にのみ共通する点も見出される[60]。今それについて述べることはできないが，従来の枠組みを取っ払い，仏教を介して，ユダヤ教とキリスト教とを比較する視点を導入することによって，宗教あるいは文明研究に新たな地平が開かれるのではないか，と筆者には思われてならない。

付録　活仏・チョギャム・トゥルンパ

チョギャム・トゥルンパ（Chögyam Trungpa）は，1940年に東チベットに生まれた。生後13ヶ月でトュルクとして認定され，チベットの四大宗派の一つであるカギュ派のスルマン僧院院長の第11代トゥルンパとして就任。1944年には，大僧院長（スルマンの諸僧院の長）に任命される。以後，1959年にチベットを離れるまで徹底的な仏教教理の学習と瞑想実践の訓練を受ける。1958年には学習を修了し，キョルポン（doctor of divinity）とケンポ（master of studies）の学位を授かる。

中国共産党による武力支配が明白となったため，二十歳のトゥルンパは，300人のチベット人を率いてヒマラヤを何ヶ月もかけて越え，インドへの亡命を果たした。その後，ダライ・ラマから青年ラマ僧研修所の精神面のアドヴァイザーとして任命され，3年間働いた。その間，頭脳明晰な彼はすさまじい勢いで英語を修得した。

1963年にスポールディング奨学金を得て，チベット時代からの友である同い年のアコン・トュルクとともに，トゥルンパは，オックスフォードへ留学し，西洋哲学，比較宗教学，美術などを学ぶ。ついてゆくのが困難な講義もあったが，チューターの助けを借り，プラトンやその他の西洋哲学者の勉強に没頭した。インドで初めて近代文明にさらされたが，イギリスで見聞きしたものは，彼にとって全く新しいものであった。西洋文化にも独自のすばらしい価値があることを認め，よく理解し，瞬く間に吸収していった。彼は油絵にも興味を示したが，日本の伝統文化（美）をこよなく愛し，草月流（華道）の師範の免状をももつ。ちなみに，後に，サンフランシスコ禅センターの創設者・鈴木俊隆老師と深い友情で結ばれることになる。

トゥルンパは，勉学に励む一方，西洋の学生たちに仏教を教え始め，西欧文明のなかに仏教を広め根づかせる方法を模索した。運良く協力者を得て，1968年にスコットランドにサムエ・リン瞑想センターを，アコンと共同で設立した。西洋最初のこのチベット仏教瞑想センターに，彼らは，8世紀にパドマサンバヴァによって創設されたチベット最初の僧院と同じ名前（サムエ・リン）を与えたのであった。

その後トゥルンパは，ブータン王室に招かれた際，パドマサンバヴァが千年以上も前に瞑想をしたという洞窟で，十日間のリトリートをするという運命的な機会を得た。彼は，自分自身の人生，とりわけ西洋にダルマ（仏法）を普及させる問題について思いをめぐらした。未来のヴィジョンを乞う彼の呼びかけに，根本グルとカギュ派の先師たちは感応した。トゥルンパは1969年に英国に戻り市民権を得て，英国人となった，最初のチベット人となった。自分の人生を100パーセント西洋への布教に捧げる覚悟はできたものの，彼にはその仕方についてまだためらいがあった。そんな折，交通事故を引き起こし，彼の左半身は麻痺してしまった。しかし，この事故がトゥルンパの迷いを追いやった。彼は，ついに決心した。

教えに，完全にそして純粋に没頭するとき，人は，自己欺瞞を伴うことは許されない。私

は，もはや自分自身のいかなるプライバシーも，いかなる特別なアイデンティティあるいは伝説も保持することはできないだろう。僧衣にくるまれて，何か謎めいたものという印象を与えるべきではないのだ。私にとって，それは，障害にすぎないことがわかった。サンガにさらに献身するという意識をもちながら，私は出家戒を捨てる決意をした。これまで以上に，自分自身を仏教に捧げている，と感じながら。(Fields 1992: 303)

トゥルンパ活仏は，洋服姿となり，若いイギリス人女性（Daiana J. Mukpo）と結婚した。しかしこの豹変ぶりは，周囲，特にアコンとの対立を招き，結局英国での活動を断念して，1970 年 1 月に北米に身を移した。バーモント州バーネットに Tail of the Tiger（現在のカルメ･チョリン）を設立し，同年 5 月にはニューヨークとカリフォルニアへ講演ツアーに出かけた。ショップの棚にグルやスワーミや Roshi たちがごった返している様子は，トゥルンパにとっては，まさに「スピリチュアル・スーパーマーケット」であった。スピリチュアリティの物質主義（spiritual materialism）を断つことが，自分の使命である，とトゥルンパは確信した。彼が人目をはばからず（or 人目につくように），酒を飲み，タバコをふかし，女弟子たちとベットをともにしたのも，この使命のためである（と筆者は理解している）。トゥルンパは，自在な英語で，北米とヨーロッパ各地で何百回もの講演やセミナーを繰り返した。すぐれた仏教学者であり教師であるのみならず，芸術家でもあり詩人でもあった彼はまた，ダルマ芸術祭や生け花展などを開催し，英語の詩集も出版した。彼のワイルドな教化法が物議をかもしはしたが，天才トゥルンパは，西欧人の心を掴み，真のスピリチュアリティの指導者としてカリスマ的な人気を博した。

トゥルンパは，幾つかのリトリートセンターを建設する一方，北米とヨーロッパの都市に百以上の小規模な瞑想センター（ダルマダートゥ / 法界）の設置も展開した。1973 年には，点在するセンターと諸活動を管理するヴァジュラダートゥ（金剛界）をコロラド州ボールダーに設立し，そこに拠点を移した。1974 年には，ボールダーにナーローパ学院も創立した（1986 年にカレッジとして公認。現在，Naropa University）。

ナーローパ学院は，1974 年の第一回サマーセッションの案内によれば，明晰で堅固な思考が正気のスピリチュアルな旅の中心となる，という前提のもとに設立された。必要とされるものは，西洋の知性的批判的精神と，東洋の，経験と瞑想の仕方とが，真っ向から出会う十字路，すなわち理性と直感が一緒になる場であった。その案内には，種々の瞑想，太極拳，茶道，タンカペインティング，チベット語，サンスクリット，中観哲学，文化人類学，物理学，サイバネティックスに関するコースの提供が謳われている。実際，多くの著名人が講師を務め，2000 人という，予測の十倍の学生を集めた[61]。

トゥルンパは，仏教僧院も建立した。カナダ・ノバスコシア州ケープブレイトン島にある Gampo Abbey がそれである。1986 年には，同州の州都ハリファックスに本部（ヴァジュラダートゥ）を再移動させている。

トゥルンパは，ヴァジュラヤーナをアメリカに上陸させることには極めて慎重であったが，4

年間の訓練をへて準備のできた弟子たちに伝授した（Fields 1992: 312）。彼はまた，実践プログラムへの禅の取り込みからシャンバラトレーニングプログラムの確立まで，すなわち小さな工夫から最も革新的な道の一大構想の実現にいたるまで，多方面にそしてあらゆるレベルに対応した修行の制度を入念に作り上げた。それらは現在，シャンバラという組織のもとに統合されている。

第 11 代トゥルンパ・トュルクは，極めて斬新な方法で西洋人を教化し続けたが，交通事故の後遺症から癒えることはなく，過労と飲酒が重なり，カナダへ移動した翌年の 1987 年に，48 年の生涯を終えた。多くの弟子と，妻と，五人の子供が残された。現在，長男のサワン・ウーセル・ランジュー・ムクポ（Sakyong Mipham Rinpoche）が，トゥルンパの後を継ぎ，ヴァジュラダートゥのリーダーシップをとっている。

1992（?）年の冬，東チベットで，18 ヶ月の幼児が，第 12 代トゥルンパ・トュルクとして認定された。

＊ユダヤ教関連の記述については，拙稿を一読して頂いた明治学院大学准教授の高木久夫氏からご指摘を受け，誤りを正すことができた。参照・引用した英文の読み及びそれらの背景に関しては，マギル大学教授の Victor Hori 氏からご教示を賜った。また，同志社大学教授の手島勲矢氏の後押しがなければ，本稿を執筆する勇気はもてなかったであろう。三氏に，心よりお礼を申し上げたい。

注

1）Seager（1999: 35–7）. この，リチャード・シーガーの *Buddhism in America* は，現在のところもっともよく整ったアメリカ仏教の概説書である。本稿におけるアメリカ仏教の捉え方は，多くの場合，この概説書に依拠している。

2）ティク・ナット・ハンの最初の渡米は 1966 年であるが，アメリカ人が彼の宗教理念の実現であるインタービング教団について知るのは，1985 年の彼のアメリカツアーの時である（Seager 1999: 203）。他方，ダライ・ラマが初めて西洋の地を踏んだのは 1973 年であり，ノーベル平和賞の受賞は 1989 年である。なお，ダライ・ラマが多方面において精力的に活動し，さらにチベット支援団体とハリウッド映画会社が提携したことなどによって，チベット仏教が非常なブームを迎えるのは，1990 年代である。

3）ハーバード，プリンストン，バージニア，ミシガン，ウィスコンシン，シカゴ，インディアナ，ワシントン，スタンフォード，カリフォルニア，ハワイ大学には，充実した仏教学コースが設けられ，最低三人の専門教授がいるという（田中 2002: 291）。

4）多様な伝統的な仏教は，アメリカでは，テーラワーダ（小乗），大乗，金剛乗（チベット仏教）という現代の三乗のもとに分類される（Seager 1999: 21–32）。

5）プレビシは，こういう。「西洋諸国では，いっときに，一つの場所に，おそらく同じ都市の同じ街においてさえ，およそありとあらゆる派に属する仏教伝統がすべて存在するという，尋常でない状況に人々が直面しており，それは，アジアでは決して起こらなかった事態です」（Transcript of *Buddha Realms*, PartII: *Permanent Change*, TV documentary, Australia. 2001 年 10 月 28 日放映 [http://www.abc.

net.au/compass/s381200.htm]）。これは，ニューヨークとロサンゼルスで筆者が実際に目の当たりにした光景である。

6）‘convert Buddhists’ を改宗仏教徒と訳さなかったのは，シーガー（Seager 1999: 9）に倣い，*convert* を，別の宗教を丸ごと受け入れるというような強い意味で用いないからである。本稿では，ブッダのある一群の教えへ心を向けた人を，改心仏教徒として言及する。

7）もとより科学的な数値ではない。カメネッツは，非アジア系アメリカ人仏教徒の諸々のグループに占めるユダヤ人の割合は，6 パーセントから 30 パーセントであり，「それは，アメリカの人口に占めるユダヤ人の割合である 2.5 パーセントの 12 倍にも達する」（Kamenetz 1994: 7）という。

8）DVD 版の宣伝によると，オスカーにノミネートされ，世界の 50 以上の映画祭で上映され，また PBS や歴史番組でも放映された。

9）筆者の専門は，仏教修道論と仏教哲学（中観的無分別唯識思想）である。筆者は，4 世紀頃にインドで成立し，チベットでも最重要論書の一つとされる初期ヨーガーチャーラ（瑜伽行派）の『大乗荘厳経論』のサンスクリット原典の解読を中心に研究をすすめ，その研究で 2002 年 3 月に博士号（京都大学）を取得した。その後，インディアナ大学に研究滞在（2002 年 7 月から一年半）する機会を得て，アメリカの仏教状況やユダヤ人仏教実践者が多いという事実を知ることとなった。筆者は，ユダヤ教についての専門知識はもたないが，ユダヤ人の仏教受容に関する日本における研究の端緒となることを願い，本稿を執筆するに至った。

10）進歩主義的正統派の夫婦である，ラビ Irving Greenberg と Dr. Blu Greenberg，再建派女性ラビ Joy Levitt，カバラー神秘思想の斬新な解釈で知られるカリスマ的ラビ Zalman Schachter-Shalomi，1985 年にロサンゼルスに観想ユダヤ教センター（center for comtemplative Judaism, Metivta）を創設したラビ Jonathan Omer-Man，スピリチュアルな革新運動のリーダーである Moshe Waldoks，仏教学者の Nathan Katz，高名なイスラエルのユダヤ学者の Paul Mendes-Flohr，以上の八名である。

11）[http://www.nytimes.com/library/film/012999lotus-film-review.2.ram]

12）Fields（1992: 129）及び佐藤哲朗『大アジア思想活劇――仏教が結んだ，もうひとつの近代史――』（サンガ 2008）329–330 参照。

13）IMS の詳細については，田中（2002）参照。

14）本稿の「瞑想」と「メディテーション」（meditation）は完全に置き換え可能である。また本稿では，*meditation* と *contemplation* とを強いて区別することもしていない。つまり，人によっては *contemplation*（観想）と判断する場合も，メディテーションに含めている場合がほとんどである。なお「瞑想」は，漢訳仏教語ではない。*meditation* という英語の和訳語とみなしてほぼ正しい。詳細は，保坂俊司『仏教とヨーガ』（東京書籍 2004）pp.52–56 参照。

15）コーンフィルドは，ダートマス大学在学中にアジアの宗教に興味をもち，1967 年に大学を卒業後，Peace Corps に参加し，タイで働いた。そこでメディテーションを始め，多くの教師に師事した。ゴールドスティンもまた，タイで Peace Corps のワーカーであった時に仏教に関心をもつようになった。1967 年にインサイトメディテーションに着手し，その後多くのアジア人教師のもとで修行した。彼ら二人は，帰国後，ナーローパ学院で初めてメディテーションを指導することとなった（注 28 参照）。

16）ヴィパッサナー（Pali: vipassanā; Sanskrit: vipaśyanā; 観 , 毘鉢舎那）は，通常，サマタ（Pali: samatha, Sanskrit: śamatha; 止 , 奢摩他）とペアで修習されるものである。古典的な止観行（= 瑜伽行）は，筆者の専門領域（文献学）であり，その立場からみた，現在盛んに行われているインサイトメディテーション等については，教理的な問題も視野にいれて，稿を改めて検討したいと思う。今は，止と観の基本的な機能（状態）を述べるに留める。止とは，精神集注であり，高ぶった心を鎮める手段でもある。観とは，洞察（智慧）であり，沈み込んだ心を活気づける手段でもある。ヴィパッサナーとサマタは，包摂概念でもあり，様々な瞑想状態 or 瞑想法は，このどちらかか，あるいは両方に包摂される。なお，IMS が行う具体的な瞑想法である *mindfulness*（念）と *loving-kindness*（慈）については，田中（2002: 298–300）を参照。

17）いわゆる Engaged Buddhism（社会に関わる仏教）である。

18）近年，グレイストンのユニークな経営方式は日本でも着目され，テレビ番組で取り上げられたようである。「CBS ドキュメント・グレイストン・ベーカリー , Part2 」（http://www.youtube.com/

watch?v=SkD6eRv2kTU）は，その一部である。

19）日本曹洞宗系のロサンゼルス・サンフランシスコ禅センターは，アメリカの代表的な禅センターである。なお，この二つのセンター及びハートマンについては，Iwamoto（2005）参照。

20）Kamenetz（1994: 7–8）. なお，ここにいう過去 20 年間とは，ナーローパ学院が創設された 1974 年頃以降である。注 28 参照。

21）Prebish（1999b）は，スカラー・プラクティショナーズが，沈黙のサンガ（隠れサンガ）を形成していることを主として論じたものである。スカラー・プラクティショナーズとは，様々な仏教伝統やセクトと結びついた儀礼実践を行う仏教学者をいう（p.184）。北米の仏教学者のうちで，そのような仏教実践者であるとはっきりと表明している者は，少なくとも 25 パーセントはいるという。また，公にすることを避けている者も，少なくとも 25 パーセントはいると推測されている（p.208）。公にしない理由は，北米では大学によっては，仏教を実践していることが，学者としてマイナス評価を受けるからである。プレビシも，同僚に自分が仏教徒であることを告げるには相当の勇気が必要であった。ちなみにそう告げた時の同僚の反応は，‘Oh, now you've become *Buddhish*’ であった。冗談ではなく，本気でそう言ったという。

22）The Berzin Archives（http://www.berzinarchives.com/web/en/index.html）は，非常に優れたものである。筆者は，2007 年夏にドイツのハンブルク大学で開催された，*First International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha: Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages*（『サンガにおける女性仏教徒の役割──比丘尼ヴィナヤと戒脈──』第一回国際会議。詳細は岩本（2008）参照）の折にベルジンを知った。その会議は，チベット仏教に女性出家制度を確立（ビク尼戒を導入）することを主たる目的とし，最終日にダライ・ラマが連日の議論をうけて何らかの決定をなすという設定で行われた。世界の異なった宗派の仏教教団やセンターの指導的立場にある実践者だけでなく，仏教文献学者も加わったという点で画期的なものであった。ただ，会議を主導した西洋人ビク尼が，チベット人尼僧たちに胸のうちにしまっておくように期待した内実が吐露されるという想定外の出来事もおこった。騒然となった会場を鎮めるために，通訳と解説のできる人物を必要としたが，多くのチベット仏教の実践者が，ベルジンこそ適任者であるという態度を示した。その時，彼がいかに現代仏教にとって重要な人物であるかを認識した。

23）Yollin（2005）によれば，彼は，2005 年当時，55 歳である。

24）チョドンは，彼女自身のこの苦い経験から，チベット仏教にビク尼の授戒制度を確立するための運動に積極的に関わり，注 22 に記したハンブルク国際会議の開催にも尽力した。その会議中，筆者は休憩時間に彼女と個人的に話をする幸運に恵まれた。以前より彼女に敬意をもっていたが，より一層その念を強くした。筆者が最も尊敬する西洋人仏教徒の二人，チョドンとベルジンがユダヤ人であることは，『ハスの中のユダヤ人』を読むまで知らなかった。

25）第一世代の西洋人ビク尼として，チョドン自身が味わった言語上の困難や，ビク尼制度が確立していないことから被った苦難等を解消したものである。

26）もっとも，「世界の修繕」（*tikkun olam*）にコミットするというユダヤ教の教義に照らせば，ベルジンもチョドンもまさにそれに加担していることになり，損失にはならない，という寛大な考えも提示されている（Kamenetz 1994: 141）。

27）詳細は，本稿付録「活仏・チョギャム・トゥルンパ」参照。

28）トゥルンパが，彼の門下生たちは仏教のオイヴェイ派（Oy Vay school）を形成している，と冗談をいうほど，彼の周りにはユダヤ人が多かった。アレン・ギンズバーグ，アメリカ仏教史を書いたリック・フィールズ，シャンバラ書店を創業した Sam Bercholz，そして後述するネイサン・カッツも，トゥルンパの門下生であった。またトゥルンパが 1974 年に開設したナーローパ学院の第一回サマーセッションのコースの講師にも，ユダヤ人が目立った。アジアから帰国してまもないコーンフィルドとゴールドスティンは，インサイトメディテーションを教えた。酷似した求道歴をもつ二人ではあるが，実は顔を合わせたのはそれが最初であり，瞑想指導をしたのもそれが初めてであった。そのシンプルな瞑想法が大歓迎されることを知った二人は，その後 IMS を共同で創設するに至ったのである。

その他，ザルマン・シャヒターや LSD 研究が原因でハーバード大学心理学教授の職を追われた，著名なユダヤ人ヒンドゥー教徒である Ram Dass（aka Richard Alpert）も講師を務めている。また，デリカ

テッセン・インテレクチャルと自称するアレン・ギンズバーグも，“Spiritual Poetics” を教え，トゥルンパとともに，即興創作で詩偈のやりとりを行った。ついに出会った真の師として仰ぐトゥルンパから，ダルマのライオンという法名を授けられたギンズバーグによると，トゥルンパがユダヤ人を惹きつけた理由の一つは，彼がイディシュ語のアクセントを操れたからである（Kamenetz 1994: 149）。なお，ゴールドスティンによれば，このナーローパの第一回サマーセッションの頃に，ユダヤ人が西洋仏教の先導権を握った（Kamenetz 1994: 8）。ちなみにプレビシも，この第一回サマーセッションに参加している（Prebish 1999b: 208）。

29）古くから知られている，入息出息念，不浄観，九種心住などをはじめとして，枚挙にいとまがない。チベット仏教が最も多くの瞑想法を伝えている。

30）ダラムサラでの対話に先立ち，1989 年のダライ・ラマのアメリカツアーの際に，ニュージャージー州で予行会議がもたれた。そのときにカバラーを知ったダライ・ラマは，その神秘思想に興味をもったようである。

31）この場合の「空性」とは，般若経典の説く，縁起と相即する空性である。他方「エイン・ソフ」は，「終わりがない」という形容詞的表現であるが，カバラーでは，人間の理解を越えた神の属性として，さらに神そのものとして解釈される。

32）「スピリチュアリティ」という言葉は，昨今濫用され，概念規定して使用すべきである。しかし本稿では，文脈から指示するところは容易に把握できるであろう。スピリチュアリティといえば，Conze（1957）は，欧米人に向けて，この一文でもって仏教を説き起こす。“Buddhism is an Eastern form of spirituality. Its doctrine, in its basic assumptions, is identical with many other teachings all over the world, teachings which may be called 'mystical.'” この初版本が刊行されて半世紀以上も経つが，海外では今も読み継がれる好著である（無論，文献学的実証研究が進んだので訂正すべき箇所はある）。般若経典研究で知られたすぐれた文献学者であり，瞑想実践者でもあった（Prebish 1999b: 183），ドイツ人学者エドワード・コンゼがいうように，仏教のかなりの部分が，スピリチュアリティといえるであろう。本稿は，チベットのタントラ（いわゆる秘密の教え）のみが，あたかも仏教のスピリチュアリティであるかのような印象を与えるかもしれないが，そうではない。

ところで，コンゼは本著作を次の言葉で締めくくっているが，実に感慨深いものがある。「数多くのヨーロッパの佛教徒が，僧の生活に引かれて，セイロン・中国・日本に渡った。ヨーロッパで佛教僧院を設立することには大きな障害がある。しかし，昔の中国の場合ほどには，ひどい事情ではない。現代文明の破綻がますます明白になるにつれ，ますます多くの人々が過去の智慧に引きつけられてゆくであろう。そして，彼らのうちで佛教に引きつけられる者も幾人かはいるであろう。サフラン色の僧衣を着たヨーロッパ人が，いつどこで最初に出現するであろうか。これは今後に残された問題である」（邦訳書 p.319 より引用）。

33）なお，シャヒターは今はハシードではなく，ユダヤ教革新運動に関わっている。ユダヤ人代表の一人であった正統派の Blu Greenberg は，彼について，アメリカのユダヤ教界でもっとも論議を呼ぶラビの一人である，と述べている（Kamenetz 1994: 73）。

34）オマーマンが，カバラーを継承するに至る経緯は非常に興味深い。彼は，イギリスのそれほど厳格ではない正統派の家庭で育った。シオニストであったため，青年時代にイスラエルへやってきた。1956 年にポリオで足が麻痺するまでは，キブーツで牛飼いとして働いた。その後エルサレムへ移り，出版社に職を得た。高名なタルムード学者で神秘家ラビである Adin Steinsaltz と，彼の個人編集者として，4 年間協働し，*Shefa Quarterly* を編集した。オマーマンはまたゲルショム・ショーレムとも仕事をし，*Encyclopedia Judaica* に載せるカバラーに関するショーレムの論文を編集した。それが，オマーマンの心の奥底に触れた。ショーレムの示唆に従い，カバラーを勉強するためにヘブライ大学に入学した。そこで得たものもあるが，テクストから学ぶだけでは満足できず，より伝統的な教師を探した。

彼は，その当時カバラーが伝授されていた，エルサレムの超正統派コミュニティには属していなかった。しかし彼の最も重要な二人の教師は，「社会組織上の直接の系譜ではない者とコミュニケートしようとしていた」。オマーマンは，ブラツラフのハシディズムの流れを汲むコミュニティの出身者と，タンジールのカバリストコミュニティから教説を継承している人物からカバラーを受け継いでいる。「ハシディズムの教師は，私が彼のコミュニティに加わらないことを知っていたが，それでも私に教授

した。いくつかの点で私はこの事を，それを他へ伝えよという難題を彼から突きつけられたものと解した」（Kamenetz 1994: 209–10）。オマーマンは，その後何年も研鑽を重ね，ザルマン・シャヒターから個人的にスミハを受けている。そして彼自身は，最初のスミハをラビ Judith Halevy に授けた。それは，神秘的な伝承が，閉じたサークルの外へ，しかも女性へ伝わったことを意味する。彼がカメネッツに説明したところによると，タルムードはそのような教説を受け取ることができる人間を非常に制限しており，特定のコミュニティの外へそれらを伝えることは，コミュニティ仲間に対する裏切りとも考えられた。

35）ホロコーストで殺害された何百万というヨーロッパ系ユダヤ人には，ラビやスピリチュアルな教師のうちのおよそ八割が含まれるという（Jews and American Buddhism 1998: 1）。

36）仏教の瞑想を知ったオマーマンも，「瞑想への仏教のアプローチは，我々のものよりも，より訓練的（disciplined）で，構造化されている」（Kamenetz 1994: 274）と述べている。筆者は，インド仏教の実践主義的学派（4，5 世紀頃にその頂点をむかえる，大乗化した初期瑜伽行派）の研究を専門とするが，インド仏教をそのまま継承し発展させたチベット仏教の修行道体系が，最も包括的で，見事に組織化されていることを認めざるを得ない。その学問修行と瞑想修行のバランスは絶妙である。

37）たとえば，ローム（Kamenetz 1994: 261）やゴールドスティン（Kamenetz 1994: 150–1）がそうである。なお，ユダヤ人が惹かれるその他の仏教教理，及びその理由についての検討は別稿に譲らざるを得ない。

38）Tweed（1999）は，「ナイトスタンド仏教徒」（Night-stand Buddhists）と名付ける，さらにお気軽な，膨大な数の仏教実践者の存在を指摘している。つまり，仏教センターや寺には殆ど行かないが，個人的にメディテーションをし，就寝前に仏教書を読むような仏教徒が膨大にいるのである（田中 2002: 289 参照）。

39）『ハスの中のユダヤ人』には，チョドン以外に，出家した別の二人のユダヤ女性も登場する。アイルランド出身の Ruth Sonam と，ニューヨーク出身の Thubten Pemo である。

40）トゥルンパは，ロームにも，敬意を持ってユダヤ教をみるように励ましたという。ロームいわく，「リンポチェは，早くから私に，彼の希望は，自分の門下生たちが彼ら自身の伝統に戻ることだ，と言っていた。（中略）彼は，西洋人を彼ら自身の叡智へ戻すことを，彼の使命の一つだと見なしていた」（Kamenetz 1994: 258–9）。

41）カッツによれば，ユダヤ教は，たとえ最も神秘主義的にその神を解したとしても，神の実在性を一切認めない仏教とは相容れない。ブッダに帰依することは，神との契約を犯すことになる（Jews and American Buddhism 1998: 2）。

42）臨床心理学の博士号をもつコーンフィルドもそうであるが，インサイトメディテーションの教師の三分の一は，心理療法の専門家であるといわれ，実践プログラムに心理療法を取り入れている（田中 2002: 301ff）。この展開は，理にかなっている，と筆者には思われる。というのも，故臨済宗盛永宗興老師（花園大学元学長）が講義中に，あまりにも心理的にこじれた人が師の禅門を叩いたら，まずは森田療法を行う病院に入れる，と話されたことを記憶しているからである。

43）詳細は，Lew and Jaffe（2001）参照。

44）[http://www.bethsholomsf.org/clergy/alan-lew-rabbi-emeritus-z-l.html]

45）Jews and American Buddhism (1998: 1).

46）Unknown, “Zen Rabbi Alan Lew in Memoriam.” [028_Zen Rabbi Alan Lew in Memoriam-2.doc]. 更新日不明。アクセス日 2009 年 6 月。

47）Stroud（2004）によれば，フィッシャーは，禅仏教徒であり，ユダヤ教徒でもあるようだ。このエッセイの著者の Michael Stroud 自身もジュブであるが，彼もユダヤ性が蘇ったようで，二つの宗教にコミットする苦悩を味わった。その他，このエッセイから，ジュブという用語の一般化によるジュブのファッショナブル化など，ダライ・ラマとの対話後のユダヤ教内のジュブ問題の動向を垣間みることができる。

48）たとえば，Fischer（1995），（2002）である。ちなみに，フィッシャーは，Akiva Tatz and David Gottieb, *Letters to a Buddhist Jew*（Targum Press, 2004）を絶賛している。これは，ユダヤ教と復縁しようともがき苦しむシカゴのジュブと，ロンドン在住の有名なトーラー学者との往復書簡である。

49）Jews and American Buddhism (1998: 2).

50）実は，オマーマンも，彼にカバラーを伝承した二人の人物の名を明かしていない（注 34 参照）。また彼は，ダライ・ラマに，ユダヤ教の女性原理や性エネルギーに関わる教説も提示したが，そのすべてを開示することは避けた。しかし興味深いことに，ダライ・ラマは，開示された限りの教説にさえ，チベットタントラとの著しい類似点を認めた。

51）[http://www.nishmathayyim.org/teachings_march_07.php]

52）代表としてダラムサラを訪問した，正統派のラビ Irving Greenberg と Dr. Blu Greenberg は，ダライ・ラマとの面会は「偶像崇拝」に相当するということで，コミュニティから追放されかかったという（Kamenetz 1994: 12, 25）。

53）田中（2002: 291）は，仏教徒の多い地域として，南北カリフォルニア，シアトル，シカゴ，ニューヨークやハワイを挙げている。筆者は，ニューヨーク州立大学アルバニー校に 2005 年秋から 1 年間ポスト（ポスドクフェロー）を得た際，アップステート・ニューヨークに点在する派を異にする大きな仏教センター・僧院の幾つかを訪問したことがある。ウエスト・マサチューセッツとともに，ゴージャスな自然を有するその一帯は，まさに“ブッダベルト”の一部を形成している。

54）ダライ・ラマとの対話には，一神教以外の宗教思想に関連する新しい問題として，イスラエルも関心を示し，ネイサン・カッツに説明を求めている（Katz 1991）。また，Katz（2007）は，多くのシナゴーグが，仏教とユダヤ教の対話を主催していることを伝える。

55）チョギャム・トゥルンパは，こういう。「私は，私的にも倦むことを知らず，求める人たちに法を伝えるべく一命をささげている。過去十年間，主にヨーロッパ人とアメリカ人に法を説く仕事は，きわめて満足な成果をあげることができた。学ぶ人たちの多くは，過去世における法縁か宿善をもって生まれてきたものであろう」と。Trungpa（1973）の邦訳版にに対する「まえがき」より引用。

56）なお，彼は，チベットの劣悪な道路事情から交通事故をおこして負傷し，二度目の離婚も経験している（Yollin 2005）。

57）ユダヤ人訪問団の一人，高名な当時ヘブライ大学教授 Paul Mendes-Flohr は，イスラエルの絶え間ない戦乱がイスラエル人の精神，特に子供に及ぼす悪影響を懸念していた（Kamenetz 1994: 104）。なお，Obadia（2002）は，イスラエルの仏教事情に関する最初の論文であると思われる。

58）象徴的といえば，イスラエル初代首相ベングリオンが仏教を真剣に学んだという事実もまたそうである。1961 年に彼がビルマを訪問した際に，仏教僧と会話をしたのがきかっけである。彼は別の古代の叡智に強く惹かれたのであった（Kamenetz 1994: 165）。「ユダヤ人と仏教」でも，旧知の仲である，ベングリオンとビルマ連邦共和国初代首相ウー・ヌ（U Nu）が，テレビインタビューで親しげにユダヤ教と仏教について会話する映像が流れる。

59）佐藤研『禅キリスト教の誕生』（岩波書店 2007）は，キリスト教の禅受容に関するすぐれた研究である。

60）筆者は 2009 年 2 月から，同志社大学一神教学際研究センターのプロジェクト「グローバル化する一神教の思想的研究」に共同研究員として参加し，仏教と，いわゆる一神教との類似点や相違点について熟考する機会を得ている。

61）Fields（1992: 316–7）及び注 28 参照。

参考文献及び資料

＊本稿中『ハスの中のユダヤ人』及び「ユダヤ人と仏教」と略称したものは，Kamenetz（1994）と Jews and Buddhism（1999）であり，本稿の主要資料である。

Boorstein, Sylvia 1998. *That's Funny, You Don't Look Buddhist: On Being a Faithful Jew and a Passionate Buddhist*, San Francisco: HarperSanFrancisco.

Conze, Edward 1957. *Buddhism: Its Essence and Developement*, 3rd ed., Bruno Cassirer & Oxford（1st ed. 1951）. 邦訳書 : エドワード・J・D・コンゼ著 / 平川彰・横山紘一訳『コンゼ佛教──その教理と展開──』大蔵出版 , 1975.

Fields, Rick 1992. *How the Swans Came to the Lake: A Narrative History of Buddhism in America*, 3rd rev.

ed., Boston and London: Shambhala International（1st ed. 1981）.

Fischer, Norman 1995. *Jerusalem Moonlight: An American Zen Teacher Walks the Path of His Ancestors*, San Francisco: Clear Glass Press.

Fischer, Norman 2002. *Opening to You: Zen-Inspired Translations of the Psalms*, New York: Viking Press.

Iwamoto, Akemi 2005. "Zen Buddhism and Gender in America and Japan: Zenkei Blanche Hartman and Raicho Hiratsuka," *World Fellowship of Buddhists Review*（*WFB Review*）, XLII-2 and 3: 11–16.

Jews and American Buddhism 1998. *Religion and Ethics Newsweekly*, Episode no. 126, 27. [http://www.pbs.org/wnet/religionandethics/week126/cover.html]

Jews and Buddhism 1999. Bill Chayes and Isaac Solotaroff, *Jews and Buddhism: Belief Amended, Faith Revealed*, documentary film（DVD）, 40 minutes, Chayes Productions, Petaluma, California.

Kamenetz, Rodger 1994. *The Jew in the Lotus: A Poet's Rediscovery of Jewish Identity in Buddhist India*, San Francisco: HarperSanFrancisco.

Katz, Nathan 1991. "A meeting of Ancient Peoples: Western Jews and The Dalai Lama of Tibet," *Jerusalem Letters of Lasting Interest*（Jerusalem Center for Public Affairs）, VP:113, 15 Adar 5751. [http://www.jcpa.org/jl/hit20.htm]

Katz, Nathan 2007. Interview with Frank Usarski. "Facets of the relationship between Buddhism and Judaism," *Revista de Estudos da Religião* junho 2007, 133–7. [http://www.pucsp.br/rever/rv2_2007/f_usarski_en.pdf]

Katz, Yocheved S. 2009. "Rabbi Alan Lew: Death of a Great Teacher, Mentor, Colleague, Activist." [http://www.nishmathayyim.org/news15.php]

Lew, Alan and Jaffe, Sherril 2001. *One God Clapping: The Spirtual Path of a Zen Rabbi*, Woodstock, Vermont: Jewish Lights Publishing（Originally published: New York, Kodansha International, 1999）

Obadia, Lionel 2002. "Buddha in the Promised Land: Outlines of the Buddhist Settlement in Israel," *Westward Dharma: Buddhism beyond Asia*（Charles S. Prebish and Martin Baumann eds.）Berkeley: University of California Press, 177–188.

Prebish, Charles S. 1999a. "Introduction," *The Faces of Buddhism in America*（Charles S. Prebish and Kenneth Tanaka eds.）Berkeley: University of California Press, 1–10.

Prebish, Charles S. 1999b. "The Academic Study of Buddhism in America: A Silent *Sangha*," *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*（Duncan Ryūken Williams and Christopher Queen eds.）Curzon Press, 183–214.

Seager, Richard H. 1999. *Buddhism in America*（Columbia Contemporary American Religion Series）New York: Columbia University Press.

Stroud, Michael 2004. "Coming Home," *Shambhala Sun*, January 2004. [http://www.shambhalasun.com/index.php?option=com_content&task=view&id=1526&Itemid=244]

Trungpa, Chögyam 1973. *Cutting Through Spiritual Materialism*, Berkleley: Shambhala. 邦訳書：チョギャム・トゥルンパ著 / 風砂子・デ・アンジェリス訳『タントラの道──精神の物質主義を断ち切って』めるくまーる , 1981.

Tweed, Thomas 1999. "Night-stand Buddhists and Other Creatures," *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship*（Duncan Ryūken Williams and Christopher Queen eds.）Curzon Press, 71–90.

Yollin, Patricia 2005. "Profile: Marc Liberman, Doctor gives Tibetans gift of sight, He's working to end cataract blindness in their country," *San Francisco Chronicle*, 4 February 2005, page B-1. [http://www.sfgate.com/cgi-bin/article.cgi?f=/c/a/2005/02/04/BAGHDB43SV66.DTL]

岩本明美 2008.「仏教比丘尼戒復興運動と 2007 年ハンブルグ国際会議」『南山宗教文化研究所研究所報』18: 25–39.

田中ケネス 2002.「インサイトメディテーション──現代社会に適するアメリカ仏教の一派──」『宗教研究』333（76–2）: 287-314.

＊ユダヤ教に関しては，主として以下の文献を参考にした。
R.C. ムーサフ・アンドリーセ著 / 市川裕訳『ユダヤ教聖典入門――トーラーからカバラーまで――』教文館 , 1990.
吉見崇一著『ユダヤ教小辞典』リトン , 1997.
手島勲矢「カバラー，メルカバー・ヘイハロット文学とグノーシス主義――ゲルショム・ショーレムとユダヤ神秘主義の「起源」問題――」大貫隆・島薗進・高橋義人・村上陽一郎編『グノーシス陰の精神史』（岩波書店 2001）146–160.
手島勲矢編『わかるユダヤ学』日本実業出版社 , 2002.
ニコラス・デ・ラーンジュ著 / 柄谷凛訳『ユダヤ教入門』岩波書店 , 2002.
ニコラス・デ・ラーンジュ著 / 柄谷凛訳『ユダヤ教とはなにか』青土社 , 2004.
ノーマン・ソロモン著 / 山我哲雄訳『ユダヤ教』岩波書店 , 2003.
市川裕『ユダヤ教の精神構造』東京大学出版会 , 2004.
市川裕・臼杵陽・大塚和夫・手島勲矢編『ユダヤ人と国民国家――「政教分離」を再考する』岩波書店 , 2008.
＊本稿で取り上げた人物やセンターなどについては，上記の他，それぞれの公式のホームページも参照して叙述した。さらに，チョギャム・トゥルンパに関しては，チョギャム・トゥルンパ著 / 武内紹人訳『チベットに生まれて――或る活仏の苦難の半生』（人文書院 1989）やチュギャム・トゥルンパ著 / 宮坂宥洪訳『心の迷妄を断つ智慧』（春秋社 2002）など，トゥルンパの英文著作の邦訳書も参照した。

Jews and American Buddhism

—— Why Jewish People are Attracted to Buddhism ——

Akemi IWAMOTO

1. Introduction: Transmission of Buddhism to the West
2. The Jew in the Lotus
3. History of the JUBU（Jewish Buddhist）
4. Jewish Roots and Buddhist Wings
5. Fascinations of Buddhism
6. Difficulties in Contemporary Judaism
7. Turning back from Buddhism to Judaism
8. Jewish Meditation
9. Conclusion: Compassionate Jews
Appendix: Chögyam Trungpa Rinpoche

Abstract

It is said that Buddhism made its formal debut in America at the World's Parliament of Religions held in Chicago in 1893. Now, more than one hundred years later, it is no exaggeration to say that all forms of Buddhism that have developed in Asia are practiced in America. Roughly speaking, Buddhist practitioners are divided into two: Asian immigrant Buddhists, and non-Asian Buddhists or convert Buddhists. In this circumstance, a very interesting phenomenon has happened: it turns out that more than 30 percent of non-Asian Buddhists are Jews and many of them are leaders among non-Asian Buddhist groups.

In this paper, I will make an outline of how American Jews have practiced Buddhism until now, including even Buddhist influence on practices at synagogues. I will examine why Jews are attracted to Buddhism, how Buddhism influences Jewish identity, and the significance of turning back from Buddhism to Judaism. This historically significant religious interaction of Judaism and Buddhism has hardly been given any attention in Japan. This paper is a basic examination of this interaction which should be the focus of further interdisciplinary research.

Keywords : JUBU, Jewish Buddhist, American Buddhism, Western Buddhism, Meditation